

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 12 日現在

機関番号：34426

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530629

研究課題名（和文）ハイリスクな状態にある利用者システムへの  
チーム・アセスメント支援ツールの研究研究課題名（英文）Study for Development of a Team-Assessment Support Tool  
Targeting High-Risk Social Work Client Systems

研究代表者

丸山 裕子（MARUYAMA HIROKO）

桃山学院大学・社会学部・教授

研究者番号：00295156

研究成果の概要（和文）：エコシステム研究会におけるチーム・アセスメント支援ツール開発作業部会メンバーとの協働により検証作業を重ね、実践支援ツールとしての目的や機能の点検・改良をくりかえし、試行版の精緻化をはかることができた。（ver.9）現在進行形の事例を用いた検証作業の過程で、効果的に検証を行うためには作業用プログラムが必要であると認識するに至り、ツール活用プログラム（試案）の作成に取り組んだ。実証研究過程から、ツールの有効性への確かな手応えを得る一方で、ツールの精緻化のみでは効果的な実践を志向したチーム・アセスメントは完結しないことをも実感している。ツールを組み込んだチーム・アプローチ支援プログラムの開発という新たな研究課題へとチャレンジしたいと考えている。

研究成果の概要（英文）：I repeated inspection work by the collaboration with the member of the team assessment working group in the ecosystem meeting for the study and repeated check, the improvement of a purpose and the function as the practice support tool and was able to make elaboration for a trial version(ver.9). Through a process of the inspection work using the case of the present continuous, I recognized it to inspect it effectively when a program for work was necessary and was able to make a tool utilization program (a tentative plan).

I was able to get positive responses from the process of the proof study to the effectiveness of the tool, and, on the other hand, the team assessment that intended effective practice realizes what I do not conclude only by elaborating a tool.

I want to challenge a new research theme called the development of the team approach support program that incorporated a tool.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：ハイリスク利用者システム、チーム・アセスメント、エコスキナー、PSW、ソーシャルワーク専門職の固有性

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、エコシステム研究会として積み上げてきたコンピュータ活用による多目的支援ツール（エコスキナー）開発・研究の一環である。エコスキナー開発の目的は、①ソーシャルワーク実践の支援ツール②利用者参加を具体化するためのツール③スーパービジョン支援ツール④教育支援ツールの、の4点を整理することができる。研究の進展とともに実証研究の積みあげからの実用化をはかる段階に到達したため、平成13年度からは、教育支援ツールの開発に取り組むこととなった。平成15-17年度には、研究代表者として、基盤研究C(1)「ソーシャルワーク実践過程へのコンピュータツール活用による教育支援システムの研究」が採択された。プロトタイプ版のコンピュータ教育支援ツールを用いて、大学や大学院生、現場の介護支援専門員など述べ約250名に演習プログラムを試行し、高い評価を得ることができた。これらの研究成果は共同研究者である太田義弘監修により「ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング-利用者参加へのコンピュータ支援-」(CD-R付)として2005年8月に中央法規から出版された。この過程から、多目的なメンテナンス機能を有するアプリケーション・ソフトを完成させており、それらを活用しながら研究を深化することが可能となった。

(2) 平成18-19年度には、研究代表者として、基盤研究C「精神医学ソーシャルワークの協働過程への利用者参加型アセスメント支援ツールの研究」が採択され、実践支援ツール開発へ本格的に着手できる機会を与えられた。利用者である精神障がい者とよばれる人たちが、ソーシャルワーカーとの協働により、自らの生活状況をアセスメントし、その主体として実践過程へ参加するのを支援するツールの試行版作成に向けた研究を継続してきた。

(3) この過程で、精神保健福祉分野で活動するソーシャルワーカーの方たちから現状についてのお話を聴くうちに、近年は問題が複雑化・多様化しており、また、発達障害や適応障害などそれまでは一般的ではなかった新規の患者が急増していることが理解された。もはや現存する制度やサービスの活用により課題解決や軽減に向かうような事例

は減少傾向にある。かつて処遇困難事例や多問題家族と表現された多様な問題が複雑にからみあい、制度やサービスの活用のみでは、あるいは単独の専門機関・施設やソーシャルワーカー、他の援助専門職との連携のみでは対応できないハイリスク利用者システム（筆者の造語～ハイリスクとは現在の状況をさす。相互の生活に影響を与える問題を抱えた複数の利用者で構成されており、「判断能力がない」「判断能力が乏しい」といわれる利用者がその中に含まれる）への支援がソーシャルワーカーに求められているとの印象を強くした。教育支援ツール開発中に演習用事例作成に向けて趣旨を説明し、原案となる事例の提供を現場のソーシャルワーカーに依頼した際も、精神保健福祉分野と関連があることを条件としたわけではないのに、いずれも精神障がい者とよばれる人たちがかかわっている事例があがってきていた。また、精神保健福祉分野の事例にも、精神障がいを有し、シングルマザーである利用者が複数の知的障がいの子供を抱えている事例、老親の介護問題が生じたことにより生活状況が変化した事例が提示されていた。その際、事例提供者の方からは、他職種というよりは、他領域の、時には同領域の、異なる機能をもつ機関、施設に所属する社会福祉専門職の方たちの理解不足や対応への不満と連携のむずかしさが語られた。どちらの立ち位置から問題をみているかの相違はあるが、本来、ソーシャルワーカーとして解決に向けて取り組むべき問題は同一のものであると考えている。

## 2. 研究の目的

これまでの教育支援ツールや精神保健福祉分野における実践支援ツールの研究を通してハイリスク利用者システムへかかわる各関連領域からなるチーム・アセスメントへのニーズや重要性を実感している。本研究では、これまでの研究成果の蓄積を基盤とし、ハイリスク利用者システムへのチーム・アセスメントを支援するツールの開発へとつなげることが目的である。

本研究におけるチームとは、他職種を含んだものではなく、ハイリスク利用者システムにかかわる様々な領域のソーシャルワーカーから構成されることを前提としている。そういった意味では、自らが働いている領域にかかわらず、ソーシャルワーカーとして問題をどうとらえ、アプローチするのの核にな

る部分が反映されたツールともいえよう。将来的には、このチーム・アセスメントの一部として、利用者自身によるアセスメントを組み入れたい、つまりチームの一員として利用者を位置づけたいと構想している。本研究では、ハイリスク利用者システムにかかわるソーシャルワーカー・チームを想定しているが、その立ち位置は精神医学ソーシャルワーカーとしての視点からのものである。

### 3. 研究の方法

ハイリスク利用者システムにかかわる多領域のソーシャルワーカー・チームがチーム・アセスメントを行う際に重要となるアセスメント項目を抽出し、さらにそれらの項目に関する検証作業を積みあげ、コンピュータ活用によるチーム・アセスメント支援ツールの試行版作成をめざした。

以下の方法により、アセスメント項目の抽出と検証作業を行った。

(1) 事例研究 - 多領域の複数のソーシャルワーカーがかかわった事例に基づき、アセスメント内容と支援活動を分析し、支援ツールで用いる項目を検討（基礎研究）

(2) 聞き取り調査 - ハイリスク利用者システムにかかわり対応に苦慮した経験のある現場のソーシャルワーカーや現場経験を有する研究者から、事例としての情報を蓄積した。アセスメント内容と支援活動を分析し、チーム・アセスメント支援ツールで用いる基本項目の精査

(3) 上記(1)(2)の事例において、精神保健福祉領域におけるハイリスク利用者システムと児童・高齢者など他の領域からみた精神障がい者とよばれる人たちがかかわっているハイリスク利用者システムへのソーシャルワーカーの問題のとらえ方の比較考察とツールへの反映

(4) チーム・アセスメント支援ツールの検証作業 - ハイリスク利用者システムの同一事例にかかわった複数のソーシャルワーカーの協力を得て、実際事例（終了事例・現在進行形事例）に基づき、プロト版を用い、入力してもらい検証

(5) エコシステム研究会のメンバーの協力による専門的視点からの実践支援ツールとしての目的や機能の理論的・実践的再検討と実用化へ向けての精緻化

### 4. 研究成果

(1) 教育支援ツールや精神保健福祉領域における実践支援ツール開発経験を活かし、実践支援ツールとしての目的や機能の点検をくりかえし、基盤となる理論の再構成を行うことができた。上述したメンテナンス機能を有するアプリケーション・ソフトを活用し、アセスメント項目の精査を行い、プロトタイプ版作成へと反映することができた。

(2) ハイリスク利用者システムにかかわり対応に苦慮した経験のあるソーシャルワーカーからの事例のヒアリングからは、以下のような本研究への示唆を得ることができた。

①当初は、異なる領域で活動する少なくとも3名の社会福祉専門職（うち1名はPSW）がかかわった事例を想定していた。精神保健福祉領域で活動するソーシャルワーカーの方へのヒアリングを行う過程で、3者と最初から限定せず、社会福祉専門職との連携で苦労した事例としてあげてもらおうと、ソーシャルワーカーとしての共通基盤が問われるような多様な事例が提示された。一方、児童・高齢者などの他領域からとらえた精神障がい者とよばれる人たちがかかわっているハイリスク利用者システムに関する事例のヒアリングでは、3者と限定するとなかなか事例はあがってこないが、連携で苦労した事例と質問を変えるとPSW同様多様な事例が提示された。このことから、ソーシャルワーカーの方たちが現場で最も苦慮していることから、研究をはじめることの必要性を認識することができた。ハイリスク利用者システムの定義の再検討へとつながった。

②その後のソーシャルワーカーへの事例のヒアリング調査からは、インフォーマルな資源をもたない精神障がい者を有する単身者や他地域からの転出者、重複障がい者を有する利用者、HIV患者、若年難病患者への支援における社会福祉専門職間の連携の重要性を物語る新たな対象が提示された。

これらに 대응する実践支援ツールとなるようプロトタイプ版の改良を重ねている。

(3) 現在進行形の同一事例への検証作業からは、効果的な検証作業へ向けての事前準備を含むプログラム作成へと実用化に向けての発想が広がった。

①エコシステム研究会チーム・アセスメント支援ツール開発部会メンバーとの協働により、ハイリスク利用者システムの同一事例（現在進行形）にかかわっている複数のソーシャルワーカーの協力を得て、実際の事例に基づき、プロトタイプ版（ver. 4）を用いて、各立場から質問項目に答える形で入力してもらい、検証作業を行うことができた。この

経験から、検証作業を効果的に行うためには、こちら側のツールの意義や活用目的などの前提となる概要の説明と協力者側の事例の情報整理、などの事前準備の必要性を認識することができた。検証作業用プログラムの試案作成に取り組んだ。

②2011年度にはこの作業プログラム試案を用いて、ハイリスク利用者システムの同一事例（現在進行形）にかかわっている複数のソーシャルワーカーの協力を得て、プロトタイプ版（ver.6）に入力してもらった形での検証作業を行うことができた。

2回目の検証作業では、協力してくれたソーシャルワーカーは、エコシステム研究会チーム・アセスメント支援ツール開発作業部会メンバーの（比較的経験年数の浅い）教え子であり、1回目のもともとの教育のバックグラウンドはさまざまであるベテランワーカーとは、実際のツール活用後の感想や意見に興味深い相違がみられている。さらに、検証作業の積み重ねが必要であるが、ソーシャルワークについての共通基盤が形成されているか否かがなんらかの形で影響しているのではないかと推測している。そのことを意識し、イメージしやすいよう例示としての事例を盛り込むなど、検証作業用プログラムの改訂を試みているところである。

③現在、検証作業用プログラム（案）を加えたプロトタイプ版はver.9にまで至っている。今後は、多様な現在進行形の同一事例への検証作業の積み重ねによる実証研究が必要な段階に到達している。

（4）これまでの研究過程で、協力いただいたソーシャルワーカーの方たちからは、事例のヒアリングやツール検証作業のプロセスそのものが自らの実践をふりかえる機会となるとの共通するフィードバックをいただいている。実践支援ツールというよりは、スーパービジョン支援ツールとしての評価であるとの印象をもっている。ツールの有効性への確かな手応えを得る一方で、支援ツールの精緻化のみでは、効果的な実践を志向したチーム・アセスメントは完結しないことをも実感しているところである。

①ツールを用いたアセスメントにより、次に必要なかわりへの気づきがあっても、それがチームにおける自らの役割理解とそれに基づく行動へとは直結しないこと。

②①とも関連するが、ツールを活用するソーシャルワーカーの実践的力量により、あるいはチームの中に力量が高いソーシャルワーカーが含まれているか否かにより、効果的なチーム・アプローチは左右される。

①に関しては、実践支援ツールとしての実用化をめざして、ツールを用いたチーム・アセスメントの結果を実践へとつなげるため

の新たなツール（例えば、各ソーシャルワーカーの役割が明確化するようなプランニング・シートなど）の開発や研究者が参加する効果的なプランニング・ミーティングの設定など教育的視点を内包したチーム・アプローチを支援するプログラム開発へと研究の視野を広げている。

②に関しては、実践を具体化する「人」である個々のソーシャルワーカーのコンピテンス形成過程に焦点化し、ソーシャルワーカーの主観的理解を切り口とした研究に着手したところである。すでにH24年度挑戦的萌芽研究「ソーシャルワーカーの実践的コンピテンスの構成要素と形成過程に関する基礎的研究」の交付内定を受けている。

（5）チーム・アプローチ支援ツールの開発をめざした研究の深化から、上述のメンテナンス機能を有するアプリケーション・ソフトの限界も明らかになってきた。質問項目の説明のための字数制限やグラフ表示（同一画面での比較表示は2グラフまで）、製品版ソフトとメンテナンス機能付ソフトとの互換性、など実践支援ツールとしての実用化をはかるためには、新たなアプリケーション・ソフトの開発が課題である。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①丸山裕子、社会福祉士養成教育におけるソーシャルワーク演習の位置と課題 - 担当教員からのヒアリング調査に基づく考察 -、桃山学院大学総合研究所紀要、査読無、Vol.38、No.1、2012、印刷中

②丸山 裕子、ハイリスクな状態にある利用者システムへのチーム・アセスメント支援ツールの研究（I） - 支援ツール開発を試行した事例の分析を通して -、桃山学院大学総合研究所紀要、査読無、Vol.35、No.3、2010、pp1-16

〔学会発表〕（計2件）

①丸山 裕子、ハイリスク利用者システムへのチーム・アプローチに関する研究（2） - チーム・アセスメント支援ツール開発を指向したヒアリング調査に基づく考察 -、日本社会福祉学会第58回大会、2010年10月10日、日本福祉大学

②丸山 裕子、ソーシャルワーカーの実践的コンピテンスの構成要素と形成過程に関する基礎的研究（1）、日本ソーシャルワーク学会第26回大会、2010年7月4日、明治学院大学

〔図書〕(計 1 件)

丸山裕子、他、中央法規、新精神保健福祉士養成講座第4巻精神保健福祉の理論と相談援助の展開Ⅰ、2012、pp246-248

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計◇件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

丸山 裕子 (MARUYAMA HIROKO)

桃山学院大学・社会学部・教授

研究者番号：00295156

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

西内 章 (NISHIUCHI AKIRA)

高知県立大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：80364131

山口 真里 (YAMAGUCHI MARI)

広島国際大学・医療福祉学部・講師

研究者番号：70441566